9

「緑」

九　★　緑

テントを買った。手頃なサイズ感で、すぐに設置できるものを。実は『マイテント』を持つのが長年のひそかな夢だった。心躍る気分である。

先日近くの大きな公園を通った時に、見慣れない露店がいくつも出ていて人で賑わっていた。沿道には満開の桜の花。みんなここで花見をするのだろう。そのとき目に入ったのが、山脈のように連なるテント群だ。お花見といえばレジャーシートのイメージだったが、昨今のアウトドアブームの影響か、今では多くの人が自前のテントを張り、思い思いに個室空間でくつろいでいる。個人のマナーが前提となるが、この新たな傾向がある程度受け入れられている寛容さがいい。休日の平和な光景に、幼い頃のある記憶が蘇った。

あれは小学3年の頃だったか。友人宅に同級生数名で泊まりにいくことになった。お泊まりといえば、いつもより遅くまで起きてゲームをしたり、テレビをわいわい見るのがその頃の定番だ。しかしこの夜はひと味違った。

そのお宅には屋上があったのだが、その日はなんとそこにテントを持ち出し、プチキャンプをすることになったのだ。特段田舎というわけでもなくごく普通の住宅地だが、外で食べるおにぎりやおやつの味は格別に美味しい。夜になると見慣れた街は雰囲気を変え、パチンコ屋が閉まるころには人通りもほぼゼロに。地上にいたらちょっと怖いんだろうか。いつもより少し高い場所から見上げる空は、うんと綺麗に見えた。

ほとんど何も見えないテントの中ではすることがない。ゲームもテレビも無し。だがそれがよかった。なんだか時間が濃い気がした。どういう流れか、好きな映画の話になり、『Ｍｒ．ビーン』や『踊る大捜査線』などが言われていくなか、友達のひとりが『プライベート・ライアン』が好きだと言った。親の影響なのか、どこで観たのか、いずれにせよ鋭いセンスだ。当時の僕はまだそこまでの感性が育っておらず、『ライアン』という言葉の音から『ライオン』、動物を連想し、いったいどんな映画なんだろうと思った。ほどなくして自分が言う番となり、昔も今もお気に入りの『ベイブ』を挙げた。ちょっぴり背中が痛かったが、終始わくわくが止まらない特別な夜だった。

あの夜以来、テントを持つことに憧れを抱くようになった。とはいえテントは子供が自分のために買うにはハードルが高く、なおかつ設営するにふさわしい場所が必要となるため、キャンプ場に自力で行けるわけでも自由に使える広いスペースがあるわけでもない当時は諦めざるを得なかった。そんな理由でしばらく忘れていた夢だったが、先日のあの花見の光景を見て、最近では公園でもルール・マナーを守ればテントを使ってＯＫな場合があることを知り、再び心に火がついたのだ。

東京には緑が少ないとよく言う。でも暮らしてみれば、自然豊かな場所がたくさんあることに気づく。僕は芝生に反応する習性があり、見つけると少しの間そこに座ってみる。目を閉じ、『無』になろうと試みる。作法は知らないが、おそらく瞑想に近い、僕にとって必要な時間だ。

それは、あの夜初めてテントの中で味わった、何もないことで本質的なものが際立つ感覚と、どこか通じているのかもしれない。